

えぐひめ

3

立川と語ろう 立川に生きよう
March 2004
écoutez bien Vol.22 No.232





160万年の夢

アキシマクジラのいた河原



今、アキシマクジラの化石は国立科学博物館分館(新宿区)に保管されていて、一般に見ることはできない。一部が貸し出されて昭島市役所ロビーに展示され、毎年8月に開かれる昭島くじら祭りでは市立昭和公園でも公開される。

発見者の田島政人さんは平成8年亡くなかった。長男で発見当時4歳だった田島芳夫さんは「一緒に現場に行っていたのですが、実はまったく覚えていないんです」。政人さんの死後、残っていた詳細なメモ付きのアルバムを整理し、仲間たちとアキシマクジラ研究会を設立し、ホームページでもアキシマクジラの由来や写真を公開している。

発見当時の驚きと報道の過熱ぶりは大変なものだった。しかし40年以上経て、市のシンボルがどうしてクジラなのか知らない市民もいる。田島芳夫さんたちは、発見50周年の2011年をめどに、アキシマクジラの化石を発見の地に展示することを夢見ている。160万年前太古の海を泳いでいたクジラが、もういちど人々の前に現れる日を待ちたい。

*田島芳夫さんのホームページ<クジラの館>
<http://park7.wakwak.com/~akishimakujira/>

「カッコウの鳴く町」で

ダブル入賞！江戸歩実さん・愛実さん

昨年11月2日、アミューたちかわ大ホールで第23回中学生の主張大会が開かれた。

2547名の応募から35名が入賞。

この中に教育委員長賞を受賞した江戸愛実さん、努力賞を受賞した江戸歩実さんの双子姉妹がいる。ふたりは第九中学校の2年生。

愛実さんの主張タイトル
「カッコウの鳴く町」に惹かれて、若葉町へふたりをたずねた。

写真：五来孝平



「今の時期はハトとカラスとスズメしか見ない」
「あとシジュウカラとかメジロとかウグイスだよね」

双子といっても並んでみるとどこか印象がちがう。

「性格も趣味もちがうから」と姉の歩実さんはいう。家族旅行で訪れた沖縄の「平和の礎」に込められる平和へのメッセージを、自分も伝えたいと中学生の主張大会に応募した。

「私はのんびりや。何をするのもゆっくりなんです」という妹の愛実さん。小さい頃からおばあちゃんとバードウォッチングをしていた。「カッコウは渡り鳥だからカッコウの声を聞くと季節を感じます。カッコウの声に和むっていうか、いやされるっていうか……」

性格は違っても得意なことが同じだけに、双子は時にライバルになる。

ふたりとも部活は美術部。平成14年東京都

近県中学生絵画コンクールで、歩実さんは銅賞、愛実さんは佳作。同じ年、歯の衛生週間ポスター最優秀賞に歩実さんが選ばれた。

平成15年、再び挑戦した東京都近県中学生絵画コンクール。今度は愛実さんが金賞、歩実さんが銀賞を受賞。勉強、部活、生徒会、あそび……くたくたになるけれど充実した日々。ふたりは切磋琢磨してお互いの才能を磨きあっているのかもしれない。

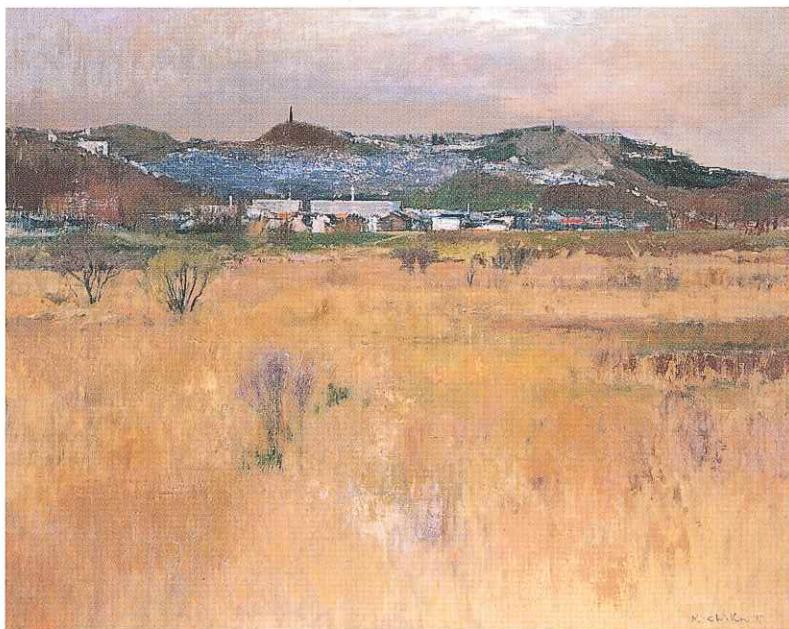
これからの立川になにを望む？ 歩実さんは「いなかはいなかのままでいい。立川駅のシンボルより、武蔵野の雑木林の保全や学校の修理にお金を使ってほしい」、愛実さんは「ずっとカッコウがくる街でいてほしい」と答えた。



「食べ物は和食、魚が好き。今一番楽しいこと？ う~ん、微妙」歩実さん

「洋風の食べ物が好き。サラダとかスープとかステーキ。部活が一番楽しい」愛実さん





「多摩丘陵遠望」

1997年 100F

一月号で同じ場所で雪景色を描いた作品をご紹介している。

川岸の枯れ草の茫洋とした広がりの中に、微妙な色彩の綾を発見する。ひと冬を越した枯れ草は紫煙をかぶつたかのような色調となり、初春の陽ざしは川風とともに、川原に敷き詰められた枯れスキ一帯を淡い狐色に染めて樂しませてくれる。ところどころに木立の芽吹きが色を添え、より一層、春の装いを感じさせてくれる。

まだ肌寒さが残るが、空気全体が柔らかみを増し、遠く人家が並ぶ丘陵にも春の気配がゆっくりと立ちのぼってゆく。間もなく、日々急速に春の景観に変貌していく。